

## 解答編

### ●小論文

1

#### 解答例

私は、余命数ヶ月の患者には死期を伝えるべきだと考える。患者には自分の人生の締めくくり方を自分で決める権利がある。回復の見込みがなく、残された時間が少ないことを知らないままでは、死に際して本人や家族に心残りが生じる可能性がある。死期を伝えることで、患者はその時期を目処として心残りのないように行動し、家族や周囲の人との限られた時間を有意義に過ごすことができる。一方で、告知が患者の重荷になるリスクもあるため、告知には細心の配慮とケアが必要だと言える。その上で死期を告知することは、患者の自己決定権を尊重し、終末期のQOLを向上させ、本人や周囲の人の心残りをできるだけ小さくすることになると私は考える。(300字以内)

#### ◀ 解 説 ▶

#### 《余命宣告の是非》

課題文をもとに、患者への余命宣告の是非について論じる。課題文は、余命宣告によって残された人生ですべきことを見定めた事例をもとに、死期を知ることが人生の締めくくりをどのように変えうるのかという問題提起をしている。現代では、患者の選択権や自己決定権が重視されるようになった。そうした中では、人生の最後をどこでどのように過ごしたいかといったこともまた、患者の選択に委ねられることが望ましい。〔解答例〕では、課題文に沿った形で解答した。

一方で、余命はあくまでも病状からの予測にすぎず、告知が患者の負担になる可能性もあり、患者の状態や家族の意向によっては、本人に伝えないという判断もありうる。いずれの方向で解答を作成するにせよ、患者や家族の希望を尊重することが望ましいと言えるだろう。

## 2

## 解答例

問1. 私は筆者の意見に賛成である。医師が信頼を得るために必要なのは、患者に伝わりやすい表現で誠実に説明する姿勢である。それ以外のもので患者の気を引こうとすることは、医師としての本分から外れると考える。(100字以内)

問2. 現代医学は専門領域の細分化が進み、チーム医療が主流となった。そのため筆者の主張は現代的ではない。むしろチーム全体で患者の情報を共有し、より良い治療法を議論することが現代の医療では重要であると考え。(100字以内)

## ◀ 解 説 ▶

## ◀19世紀の医師の心得▶

19世紀のドイツの医学書に書かれた医師の心得について、自分の考えを述べさせる問題である。

問1. 下線部①は、「流行の服装をしたり、根拠のない怪しげな説をふりまわして評判をえようとすること」を戒めるものである。下線部①の直前に「言葉遣いや動作にも注意して患者に信頼されるようにしなくてはならない」とある。これは現代にも通じる心得だと言える。患者からの信頼というものは、何よりもまず誠実な言動によって得るべきだということである。

問2. 治療法を相談する相手は少ない方がよいという心得について、現在の医学と比較して考えを述べる。下線部②の要点は3点である。

- 相談相手は少なく、多くとも3人までにする。
- 相談相手はよく選ぶべきである。
- 病人の安全だけを考え、論争をしてはならない。

このうち、2つ目は現代にも通じるものであるから、100字という字数制限上、言及しなくても構わない。相談人数の制限と論争の是非が論述のポイントとなるだろう。〔解答例〕にも示したように、現在の医学は専門分化が進んでおり、専門職の連携によるチーム医療が主流となっている。そうした中で相談人数を制限すれば、むしろ医療過誤などの問題を引き起こすリスクが高まる。また、現代は患者の自己決定権なども重視される時代である。患者の意思に沿った医療を推進するためには、論争とまではいかなくとも、関係者間の話し合いは必要であろう。

## 3

**解答例**

米国のような能力を重視する制度を日本で導入した場合のメリットとして、研究・開発能力の向上が挙げられる。特殊な才能を持つ子供に能力に応じた教育の機会が与えられ、高い能力を持つ人が定年に縛られずに活躍することで、多様な分野での研究や技術開発の発展が期待できる。一方、デメリットとして、早期教育の過熱や社会格差の拡大が懸念される。能力が社会的地位や収入を決定する制度下で、早期に子供の能力を高めようとする教育が過熱するリスクがある。また家庭環境によって能力の発見・開発が遅れた子供や時代に合わせたスキルを獲得できなかった大人のドロップアウトが深刻化することで、社会格差が拡大するリスクが高まると考えられる。(300字以内)

**◀ 解 説 ▶**

## 《年齢という差別》

課題文では、年齢、性別、人種、学歴といった枠組みにとらわれない、米国の能力主義の利点について述べられている。日本はとりわけ年齢にこだわる社会であり、それが学問的・社会的な損失につながっているという筆者の主張をもとに、日本がアメリカと同様の制度を導入した場合のメリットとデメリットを説明する。

メリットについては、研究能力や技術開発の進展という、課題文に沿った内容で進めることができる。デメリットについては、〔解答例〕では、早期教育の過熱や、家庭環境による社会格差の助長、絶えず学び直しを求められることによるドロップアウトのリスクといった問題を指摘した。

## 4

**解答例**

良い医師の資質として、利他性は必要だと私は考える。医療行為とはそもそもが他者を支援する営みであるからである。患者に寄り添うためには「純粋な利他性」も必要だが、それが強すぎると医師が患者の状態に左右され、バーンアウトのリスクが高まる。よって、私は「ウォーム・グロー」タイプの利他性を重視したい。良い医師の利他性とは、患者の思いに配慮しながら、医療行為そのものに喜びを見出すものであると私は考える。(200字以内)

## ◀ 解 説 ▶

## ◀医療者の利他性とバーンアウトのリスク▶

課題文では、患者への共感性が高い「純粋な利他性」タイプの看護師がバーンアウトやうつなどの精神症状を抱えやすいことが示されている。バーンアウトとは「燃え尽き症候群」とも呼ばれ、医師や看護師、介護福祉職、教員などのヒューマン・サービスに多いと言われる症状である。医師についても看護師と同様、「純粋な利他性」はバーンアウトのリスクを助長することになると考えられる。しかし、全く利他性を持たない医師では患者の立場に寄り添うことが難しい。したがって、〔解答例〕では、課題文で示唆されるように、医療行為そのものから喜びを見出す「ウォーム・グロー」というタイプの利他性に重きを置くことが好ましいという方向で論述した。

## 5

## 解答例

AI時代の医師に求められる役割は、患者の人生を考慮し最善の医療を実践することである。医師の役割である正確な診断や治療方針の決定は、AIの発達により代替可能なものになっていくだろう。また、医療機器や技術が進歩すれば、正確な手術もAIに委託できる可能性がある。とはいえ、揺れ動く患者の心理や選択という不確定要素を含めた判断は、AIには難しい。医学的には正しい判断であっても、患者の生きる意味を奪うような医療は最善のものとは言えない。そのため今後、医師に期待される役割は、病気や治療が患者の心や人生に与える影響を考慮し、各専門職との連携によって、患者にとって最善の医療を実践することであると私は考える。(300字以内)

## ◀ 解 説 ▶

## ◀AI時代の医師の役割▶

AIが発達・普及した現代における医師の役割について考える出題。課題文は、AI時代の到来によって、「正解を出す能力」の価値は低下したと述べる。これをもとに、医師の役割について考える。

これまでの医師の基本的な役割は、まさに「正解を出す能力」を必要とするものだった。症状や主訴などのデータから、病気やその状態を正しく判断し、それに適した治療方針を遂行する力である。しかし、その大半は知識や情報を正しく活用する力であるため、今後はAIによって代替可能

となるだろう。

そうした中で医師に期待される役割は、AIでは予測や判断のできない人間の心理的な側面を考慮に入れたものではないだろうか。AIは医学的・統計的に「正しい」答えを出すことができるが、そうして導かれた治療方針が患者の生きる意志を阻害するものであった場合、その治療は最善の治療とは言えない。そのような考えから、〔解答例〕では、医師の役割は患者やその周囲の人々の人生や思いを考慮に入れた治療を施すことだとして、論述を展開してみた。

## 6

### 解答例

問1. 明確な理由も示さずに一方的に学費返済を要求し、娘の意思をまったく無視している点。(40字以内)

問2. 客観的な立場の第三者を間に挟んで母と話し合うことで、母の妥協を引き出すのがよい。(40字以内)

### ◀ 解 説 ▶

#### 《母と子の問題の解決》

新聞の人生相談からの出題。一方的な要求を突きつける母親に悩む娘の相談である。これに対し、母親の問題点と問題解決の手段を提示することが求められている。問1・問2ともに非常に短い字数設定なので、簡潔にまとめよう。

問1. 母親の問題点は、明確な理由や妥協点を提示することなく、一方的で頑なな要求を突きつけていることである。

問2. 記事とは別の回答を示すことが求められている。〔解答例〕では、この親子の問題に対して、第三者に立ち会ってもらうことで、別の視点や母親の本意、妥協点などを探るよう提案した。